



みのる法律事務所便り
第 2 4 6 号
平成 2 2 年 1 0 月

みのる法律事務所
弁護士 千田 實

〒 021-0853
岩手県一関市字相去 57 番地 5
TEL : 0191-23-8960
FAX : 0191-23-8950
<http://www.minoru-law.com/>
✉ minoru@minoru-law.com



『田舎弁護士の大衆法律学 相続の巻(上) 火種・足枷』

発刊のお知らせ と 続編『相続の巻(下) 伝家の宝刀』



遅くなっていましたが、『田舎弁護士の大衆法律学 相続の巻(上) 火種・足枷』がやっと発刊できました。直ちに、『相続の巻(下) 伝家の宝刀』の原稿書きに取りかかっています。

『(上) 火種・足枷』と『(下) 伝家の宝刀』の2冊に分けて『相続の巻』を書くことにしたのは、視点を変えて述べたいと思ったからです。『火種・足枷』の方は、「遺産を残す立場の者は、どのように考えたらよいのか」という視点で書きました。『伝家の宝刀』は、「遺産をもらう立場の者は、どのように考えたらよいのか」という視点で書いています。

2冊を通してお読みいただければ、私がこれらの本を通して何を述べたいのかをわかっていたいただけるものと思います。

行き着くところは死生観です。死生観、つまり「死と生についての考え方。生き方、死に方についての考え方」です。生まれてきたものは、必ず死にます。どのように死んでいったらよいのでしょうか。それは、「どのように生きたらよいか」という問題の裏返しです。

私は、死ぬ時になって「楽しい人生だった。こんな楽しい人生を与えてくれた両親に感謝する」という思いに至りたいと考えています。そのためには、生き方が大事なのです。高杉晋作(享年 27 歳、1839-1867)は、「おもしろき こともなき世を おもしろく」と詠んだそうですが、おもしろく生きることがよいと思います。

「おもしろいか、おもしろくないか」は、金があるか、ないかによっても変わります。

すが、人間関係が一番大事な気がします。人間関係がおもしろければ、人生が楽しくなります。人間関係がギスギスすれば、人生は楽しくなくなります。少々おもしろくない人間がいても、それが自分とはあまり関係のない人であれば気になりません。しかし、それが身近な人であればあるほど、気になります。

遺産を巡っての骨肉相食む争いを数多く目の当たりにしてきた田舎弁護士としては、「親子兄弟間で争う遺産争いは、決して人生を楽しいものにするものではない」と感じています。

そこで、「骨肉相食む争いの火種となる財産は遺さない方がよい」と書きました。例の如く狂歌を詠んでみようとしたところ、「財産は 遺してならぬと 書きました」という上の句が出て参りました。この上の句だけでは、全く尻切れとんぼで句になりません。下の句がほしくなりました。

下の句は何がいいだろうかと思った瞬間に、「それにつけても 金の欲しさよ」という句が浮かんできました。上の句に下の句を合わせると「財産は 遺してならぬと 書きました それにつけても 金の欲しさよ」となり、一応格好が付きました。

これは自己矛盾しているようにもとれますが、必ずしも自己矛盾ではありません。遺産を遺すために金がほしいのではありません。自分と、自分の周りの者が、楽しく人生を送るために金がほしいのです。遺す金ではなく、使う金がほしいのです。

近頃、講演会などで、「人生は金ではない」などと強がって見せていますが、楽しく生きていくためには、金は不可欠です。

青空浮世乃捨を名乗って、川柳や狂歌を詠んでいます。浮世を捨てたと言っても、現実には浮世の中で生きています。「地獄の沙汰も金次第」と言いますが、浮世は金次第です。浮世に身を置く間は、金は必要です。ですから、「それにつけても 金の欲しさよ」というのは、どんな上の句でも合う下の句です。

「財産は 遺してならぬと 書きました それにつけても 金の欲しさよ」という句は、ふざけた句ですが、よく考えると間違っていないと思います。「この世を生きる上では、金は必要だ。しかし、たくさん貯めて子供達に遺してやることは不要だ」という意味が込められており、我田引水となりますが、それなりにまともな句のような気もします。

『火種・足枷』という新刊書には、私の死生観、難しく言えば、哲学の一端がいくらか書いてありますので、是非お読み下さるようお願い申し上げます。



「健康」ってなあに？

「病気」ってなあに？



「健康」とは、なんですか？世間的に言えば、「からだのどこにも悪いところがなく、丈夫で元気なこと」ということになりそうです。

「病気」とは、なんですか？世間的に言えば、「からだのどこかの具合が悪いこと」ということになります。

「からだのどこにも悪いところがない」と思っている、本当にそうかどうかはわかりません。糖尿病や高血圧症や腎不全等の生活習慣病は、重篤な状態になるまで自覚症状がほとんどありません。糖尿病や高血圧症や腎不全等が発覚するのは、機器を使っての検査の結果であることがほとんどです。検査を受けない人は、糖尿病や高血圧症や腎不全等の自覚はなく、「自分は健康だ」、「自分は病気を持っていない」と思い込んでいます。

生活習慣病のような自覚症状のないケースでは、健康か、病気かということは、検査を受けなければわからないということになります。検査を受けた結果、糖尿病や高血圧症や腎不全等が発覚した人は、「自分は糖尿病患者だ」とか、「自分は高血圧症患者だ」とか、「自分は腎不全患者だ」とか、自分は病気だということに気づくことになります。それまでは、「自分は病気ではない」と思い込んでいるのです。

自覚症状の出ない生活習慣病等においては、検査で異常を発見されるまでは「病気はない」、「健康だ」と思い込み、病人を意識しないで日常生活を送っています。「からだのどこにも悪いところがなく、丈夫で元気だ」という状態ですから、糖尿病や高血圧症や腎不全等となっても、本人も周囲も「健康だ」という見方をすることが通常です。

このような見方からすれば、「健康」とは「からだのどこにも悪いところがなく、丈夫で元気なこと」というのを、「日常生活において、心身共に支障のない状態」と言い換えることができそうな気がします。「病気」とは「からだのどこかの具合が悪いこと」というのを、「日常生活に支障のある心身の状態」と言い換えることができそうな気がします。そう表現した方が、具体的でわかりやすく、より現実的だと思います。

日常生活において心身共に支障のない状態であっても、糖尿病や高血圧症や腎不全等が発症していることがあります。それでも自覚症状がなく、日常生活において心身共に支障がない状態であれば、「健康」だと言ってよいと思います。「病気」と言わなくてよいのです。徹底的に検査し、日常生活において心身共に支障のない状態の人まで、「あなたには、このような検査結果が出ているから病人だ」とすることには、俄に賛成することはできません。予防や治療のため、検査をすることに反対ではないのですが、病人をたくさん作り出すことには反対です。

少し難しい言葉を使えば、検査の結果出た症状は「客観的病気であり」、客観的には病気でも、日常生活において支障のない状態なら「主観的には病気でない」と言えそうです。

「日常生活に支障のある心身の状態」とならないで、「日常生活において、心身共に支障のない状態」を1日でも長く続けることが大事です。これを「健康の保全」とか「健康の維持」と言ってもよいと思います。

生活習慣病は「サイレントキラー」と呼ばれるように、自覚症状がほとんどありませんので、自覚症状が出てくるとかなり重篤な状態ということになります。こうなると、「日常生活において、心身共に支障のない状態」を保つことができません。「日常生活に支障のある心身の状態」となってしまいます。このような状態になることを阻止しなければなりません。そのためには、生活習慣病においては、自覚症状が出る前に、どのような状態にあるかの検査が不可欠となります。検査の結果、生活習慣病が

発覚したら、「自覚症状が出て、日常生活において、心身に支障のある状態」、つまり「病気」となる前に治療しなければなりません。前述の健康と病気の定義（主観説）から言えば、この状態はまだ「健康」で、「病気」ではないのです。「**健康の保全**」のための**予防のための治療**なのです。

健康保全のための治療は、どのような治療方法があるかを知り、どの治療方法を選ぶかを決めなければなりません。治療方法には、外科的治療（手術）、人工臓器、遺伝子治療等もありますが、生活習慣病においては、薬物療法を選択する医療機関が一般的ですが、**食事療法が奇跡的とも言えるほど効果的であることは**、私は自らの体験に基づき、これまで多くの本を通して発表してきました。

糖尿病や高血圧症の影響で、腎不全が重篤になり人工透析に入りますと、日常生活に支障が出ます。通常は、週3日、1日4～5時間、透析に時間を取られます。こうなると、日常生活に支障がないとは言えなくなってしまいます。QOL（クオリティ・オブ・ライフ、生活の質）が低下するのが普通です。こうなれば、日常生活において支障が出ますので、私流の定義でも、病気であり、健康とは言いにくくなってしまいます。

しかし、人工透析を受けながらも、人工透析に時間を割く以外には日常生活に支障がない生き方をしていれば、人工透析の時間以外は健康だと言うこともできそうです。殊にも、「透析中に読書を欠かさない」とか、「透析中に事業計画を立てる」とか、「原稿を書く」などという人であれば、透析の時間も日常生活の延長線上にあるとも言えそうです。このような方は、腎不全であり、人工透析を受けながらも、QOLを保っているのです。「日常生活に支障がない」という意味からすると、「健康」と言えなくもないのです。

このように見てくると、「**健康**」というのは「生き方の問題」でもあるような気がします。糖尿病や高血圧症や腎不全等であっても、「日常生活に支障を来さないような生活を送る」ことが「**健康**」だと言うこともできそうです。

日常生活に支障を来さないような生活を送っていたら、「自分は病人だ」という意識は持たなくともよいと思います。たとえ人工透析を受けていても、「日常生活に支障がないから健康だ」と思い込むことができそうです。

誰だって、体の隅々まで徹底的に精査したら、どこかに異常が発見されそうです。その異常を殊更に意識し、「自分は病気だ」と思い込んだら、ほとんどの人が「病人」になってしまいます。「**病は気から**」という^{ことわざ}諺がありますが、「自分は病気だ」と思ったら、「日常生活に支障を来す心身の状態」となってしまいます。

「**病は気から**」という諺の一般的解釈は、「病気は、気持ちの持ちようでかかるものだ」ということになりましょうが、私流に言い換えれば、「健康か病気かは、心の持ち方で決まる」ということになります。たとえ、体に異常が発見されても、「日常生活に支障がないから、病気とは思わない」と考えれば、病人を意識する必要はないのです。「健康だ」と思ってよいのです。このような考え方を「**主観説**」と言うことにします。

^{おびつさんけい}帯津三敬病院名誉院長の^{おびつりょういち}帯津良一先生は、著書において、「**あまたの意識が心をつくっていて、その心の状態が健康に密接につながっていることをぜひ知っておいてください**」と述べていますが、「自分が健康か、病気か」を決める上でも、心の持ち方は大変重要な役割を果たすものだと思います。

私は、「腎不全が進行し、もう人工透析しかない」と言われてから丸5年が経過しましたが、未だ透析に入らず、食事療法で対処しています。お陰で、日常生活にはなんらの支障もなく、この5年間で、15冊の著書を発刊することができました。腎臓の機能は、正常な腎臓の5%弱しかありませんが、「自分は病人だ」と思うことはありません。「**心身ともに日常生活に支障のない状態**」であり、「**健康**」だと思っています。

そのような体験を踏まえて、「**健康**」と「**病気**」の定義に関して、私見を述べてみました。





妻倒れ 初めて知った 有り難み^{がた}
恩返したし 返す術知らず^{すべ}

平成22年10月14日



妻倒れ 初めて知った 有り難み^{がた}
恩返したくば 普段が大事

平成22年10月20日

青空浮世乃捨

平成22年10月10日（日）、朝早くに一関を出て、気仙沼、陸前高田、大船渡を経て、釜石に行きました。午後3時から打合せをしていましたが、妻が突然苦しみだし、昼に食べた物を全て吐いてしまいました。結婚して30年以上経ちますが、初めてのことでした。休日担当の病院で診察を受けたところ、「膵臓や胆嚢等に異常がある可能性が高い。然るべき病院で、精密検査を受けた方がよい」と言われました。

私は、医療過誤事件をたくさん手掛けており、平成13年（2001年）11月には、『ドキュメント医療過誤事件——弁護士の医療裁判レポート』を発刊しています。その事件は、膵臓に関する事件でしたので、膵臓や胆嚢の病気の恐ろしさは、臍^{おぼろげ}気ながらわかっていました。膵臓や胆嚢などにガンが出ているのではないかという不安が湧いてきました。もしそうだとすれば、完治の難しい病気ですので、「大変なことになった」と思いました。

「妻がいなくなったら、あれもできない、これもできない…」と思うことばかりでした。これまでいて当たり前で、いないことなど、考えてみたこともありませんでした。

た。水や空気のような存在だったのです。水や空気は、あって当たり前のように思っていますが、なかったら生きてはいけないものです。妻の有り難みが、結婚後初めてわかりました。

思い込みの激しい性分ですから、「もし膵臓や胆嚢のガンだったら、何年位持つだろうか…」などと考え、「生きているうちに、少しでも恩を返さなければならない」などとも思うようになりました。

「どうしたら恩を返せるだろうか？」と考えてみました。「美味しい物をご馳走しようか？」とも思いましたが、食欲がないのです。「旅行にでも連れ出そうか？」とも思ったのですが、そんな元気がないのです。「物でも買ってやろうか？」と思ったのですが、欲しい物はなさそうです。あれやこれや考えましたが、なかなかいい考えは思いつきませんでした。そこで読んだのが、「妻倒れ 初めて知った 有り難み

恩返したし 返す術知らず」という拙^{つたな}い狂歌です。でも、ストレートにその時の気持ちが出ていると思います。

「医療法人永仁会永仁会病院の理事長・宮下英士先生に診断してもらおう」と、妻と決めていましたが、先生のご多忙さを知っていましたので、「もう少し様子を見よう」と、すぐには連絡しませんでした。日曜日に倒れたのですが、その後絶食したので、ひどい痛みもなかったのですが、全く食欲が戻ってきません。日曜日から金曜日まで、ほとんど食べていません。これ以上は躊躇^{ちゆうちよ}できないと考え、金曜日の夕方に電話を入れました。

先生は、奥様が入院中でそちらに行っているとのことでしたが、間もなく先生から折り返しお電話があり、「明日検査をする。午前8時半までに永仁会病院に来てほしい」とのこと、翌日は土曜日でしたが、先生は土曜日を返上され、奥様のことを気にしながらも一日かかりで精密検査をして下さいました。

先生は、「膵臓にも胆嚢にも異常はない。胃や腸にも異常は見られない。多分、疲

労からきたものだと思う」との診察でした。「千田さんも奥さんもいろいろ考えて気を揉んでいると思い、早く結果を出すため、集中的に検査を進めました」ということでした。涙が出るほど、ありがたいお言葉でした。

実はこの時、**宮下理事長の奥様・りえ子様**が、重篤な病気で、他の病院に入院していたのです。それにもかかわらず、私や妻のために間髪入れず、検査・診察をしてくれたのです。そのことを後で知り、私も妻も涙を流しました。

妻の状態は、その後徐々に回復しました。先生の診察通り「疲労」からきたものでした。思い出してみれば、ここ何か月もの間、休日が全くありませんでした。倒れた日曜日の前の日曜日も、早朝から花巻、遠野を経て釜石に行きました。運転は、往復妻がしました。倒れた日曜日は、気仙沼で兄夫婦を乗せ、知らない道を探しながらの運転でした。兄夫婦を乗せているという緊張感と、知らない道をそっちこち探しながら運転したのがきいたのです。

妻は私より15歳も下ですし、体格も私よりはるかに縦・横、大きいのです。連続10時間位の運転は平気でしていました。「倒れることなどあるはずがない」と思い込んでいました。妻も53歳になったことを忘れていました。

妻に恩を返す術は思いつきませんでしたでしたが、宮下先生のお陰で、恩の一部を返せたような気になりました。私自身が恩を返したわけではありませんが、宮下先生と懇意にさせていただいていたということが、結果としては妻に対する恩返しになったような気がします。

宮下先生の**ありがたい検査・診察を通じて、妻に対する恩返しの術を知ったような気がします**。それは、夫として妻に恩を返すということは、直接妻に何かをやってやるということに限ったものではなく、普段から多くの人に恨まれたり、憎まれたりしないようにして、できることなら、「あいつのためなら、いざとなったら手を貸してやりたい」という人間関係を構築しておくことも極めて大事な術ではないかと思うに

至りました。

10月14日には、「**恩返したし 返す術知らず**」と詠みましたが、宮下先生を通じて、妻に対する恩返しの術を教えていただいた10月20日以降は、下の句を「**恩返したくば 普段が大事**」と詠み替えることにしました。

子供を持つ親として、子供がかわいいから、子供のために何か役に立ちたいと思いますが、その「役に立つ」ということも同じようなもので、「あのお父さんには、とてもよくしてもらった。あのお父さんの子供さんなら、大事にしなければならない」と思ってもらえるような人間関係を普段から作っておくことは大事なことだと思えてなりません。

宮下先生のご厚情を頂戴し、「**恩を返す術**」を教えていただきました。妻は精密検査をしてもらい、問題のないことを確認し、妻本人はもとより、私も子供達も兄夫婦も、その他の身内も事務員達も皆胸を撫で下ろし、落ち着きを取り戻すことができました。その上、宮下先生には、**身を以て、行動を通じて、普段の行いの大切さを改めて**教えていただきました。

宮下先生、重ね重ね、本当にありがとうございました。



医療法人永仁会・永仁会病院 理事長・宮下英士先生

(消化器 [胃、腸、すい臓、胆のう、肛門疾患]、泌尿器、腎臓、糖尿病、乳腺疾患の専門病院)

〒989-6117 宮城県大崎市古川旭 2-5-1 TEL:0229-22-0063

URL <http://www.eijinkai-hp.or.jp/>

(交通のご案内)

- JR 東北新幹線・陸羽東線【古川駅】「東口」または「駅南口」よりタクシー約3分、徒歩約10分
- 東北自動車道路 【古川IC】より古川市内方面へ降りて約15分